

## 古墳時代の海洋民について

西川修一

### はじめに 本講座の目的と概要

- ① ウォーターフロントの古墳  
～「海洋民」との出会い  
～「海でつながる」という「感覚」…「古墳」と水上交通の関係性
- ② 海洋民とは誰か？  
～ 私たちは「誰の目線」で歴史を見ているか？

### ○海洋民研究の回顧と新たな展開

- ① 海洋民研究を振り返る  
～三浦半島の研究／「海民」研究の深化／海洋民研究の新展開
- ② 海洋民は漁撈民か？  
～ステレオタイプな海民像を乗り越える
- ③ 古墳時代と海洋世界  
～物流・移動・ネットワークの視点
- ④ 古墳時代後期の海洋民世界の展開  
～三浦半島とひたち／太平洋沿岸の海洋民の姿
- ⑤ 海洋民系文化とは？  
～その軟構造と概念規定の困難さ／文化的な重層性を切り分ける
- ⑥ 海洋民系文化の広がり  
～石神／海神／倭人と基層文化

### まとめ 私たちのなかにある『多様性』

- ・ 複眼的、長焦点の価値観を…考古学が「できるコト」
- ・ 「考古学をやさしく・楽しく」から「文化財保護のシンパ」へと
- ・ 文化財保護の味方は「わたしたち ひとり一人」です  
～声を出して「仲間」をひとりでも増やして下さい

【引用・参考文献】(五十音順) 弥生・古墳時代を学ぶための入門書を中心にリストアップしました

- 赤塚次郎 2009 『幻の王国・狗奴国を旅する—卑弥呼に抗った謎の国へ』 風媒社
- 石川日出志 2008 『「弥生時代」の発見・弥生町遺跡』 シリーズ遺跡を学ぶ 050 新泉社
- 石野博信他 2015 『邪馬台国時代の関東』 青垣出版
- 上田 信 2016 『貨幣の条件 タカラガイの文明史』 筑摩書房
- 大島直行 2016 『縄文人の世界観』 国書刊行会
- 小路田泰直 2017 『卑弥呼と天皇制 王統の誕生と記紀神話』 洋泉社歴史新書 y 047
- 佐古和枝・早川和子 1998 『考古学はたのしい』 3 戦争がはじまった 小学館
- 佐原 眞 1987 『日本人の誕生』 大系日本の歴史 1 小学館
- 佐原 真他 1996 『倭国乱る』 朝日新聞社
- 白石太一郎 2004 『考古学と古代史の間』 ちくまプリマーブックス 154 筑摩書房
- 清水義範 2002 『博士の異常な発明』 集英社
- 瀬川拓郎 2016 『アイヌと縄文』 ちくま新書
- 瀬川拓郎 2017 『縄文の思想』 講談社現代新書
- 田中 琢 1991 『倭人争乱』 日本の歴史② 集英社
- 都出比呂志 1989 『古代史復原』 5 古墳時代の王と民衆 講談社
- 都出比呂志 2011 『古代国家はいつ成立したか』 岩波新書
- 土屋了介・西川修一編 2014 『久ヶ原・弥生町期の現在』 西相模考古学研究会
- 豊島直博 2010 『鉄製武器の流通と初期国家形成』 塙書房
- 西川修一編 2005 『東日本における古墳の出現』 考古学リーダー 4 六一書房
- 禰宜田佳男 2013 「弥生時代の近畿における鉄器製作遺跡」『日本考古学』第 36 号 日本考古学協会
- 萩原規子 1991 『白鳥異伝』 徳間書店
- 広瀬和雄 2003 『前方後円墳国家』 角川選書
- 藤尾慎一郎 2015 『弥生時代の歴史』 講談社現代新書
- 古谷毅編 2017 『古墳時代 美術図鑑』 別冊太陽 246 平凡社
- 古屋紀之・西川修一編 2015 『列島東部における弥生後期の変革』 六一書房
- 北條芳隆・溝口孝司・村上恭通 2000 『古墳時代像を見なおす』 青木書店
- 松木武彦 2009 『進化考古学の大冒険』 新潮社選書
- 松木武彦 2015 『美の考古学 古代人は何に魅せられてきたか』 新潮社選書
- 松木武彦 2017 『縄文とケルト—辺境の比較考古学』 ちくま新書
- 松田 陽・岡村勝行 2012 『入門パブリック・アーケオロジー』 同成社
- 森 浩一 1986 「潟と港を発掘する」『日本の古代』第 3 卷 中央公論社
- 若林邦彦 2013 『倭国乱と高地性集落論 観音寺山遺跡』 シリーズ遺跡を学ぶ 091 新泉社
- C・レヴィ=ストロース 1976 『野生の思考』 みすず書房
- D・グレーバー 2016 『負債論 貨幣と暴力の 5000 年』 以文社
- E・W・サイード 1986 『オリエンタリズム』 平凡社
- J・C・スコット 2013 『ゾミア 脱国家の世界史』 みすず書房
- P・クラストル 1987 『国家に抗する社会 政治人類学研究』 叢書言語の政治 2 風の薔薇

## 【用語解説】

### ●海洋民 海洋に生活の基盤をおく人々の総称

(詳細) 考古学では臨海性遺跡の存在や港湾跡などの遺構、また漁撈具を中心とした出土した考古遺物から類推して「海洋民」の存在を想定する。ひとくちに「アマ」と言っても「海人・海士・白水郎(はくすいろう)・海部(かいふ)・海女・蛋民(たんみん)…」などと表記されるし、文献史や民族誌研究などでは「海民」「海人」という用語も広く用いられている。さらに漕ぎ手=水手(かこ)、「家船」などの水上生活者=漂海民・水界民・海賊などの概念とも切り離すことができない。このように漁撈・海産・交通などの生業に関わる場合が想定され、ひじょうに多様な相貌・生活スタイルを持つ人々を想定可能なことから、ここでは、特定の生業・習俗に限定せず「海(川)に関わる生活」に関係する人びとを総称している。また信仰・神話などに関わる文化全般にも広く「海洋民」に係る文化要素がちりばめられており、より広範にとらえた場合の『海洋民系文化』も存在すると考える。

### ●臨海性遺跡 海洋に隣接し生活の営みとして海に関わる生業スタイルが想定できる遺跡の総称

(詳細) 漁撈(製塩・貝殻加工品などの製作工房・海藻などの海産物の収穫・加工)・港湾(津・水門)などの生業に関わる遺跡のほか、海洋に関わる祭祀遺跡や「海洋民の墳墓」と想定される遺跡も存在する。また「海の古墳」「海浜型前方後円墳」といった、海洋と古墳築造の背景を想定する解釈に基づく理解もある。

### ●海の古墳 築造の背景に「海との関わり合い」が想定される古墳時代の墳墓の総称

(詳細) いわゆる高塚(マウンド)を有する「古墳」に限定せず、古墳時代全般を通じ営まれた墳墓遺跡全般を含む。具体的には、横穴墓(丘陵の崖面に横穴を掘り込んだ古墳時代後期の墳墓)・石室・石棺墓・土壙墓(地表に穴を掘った遺構(土坑)のうち、人を埋葬したと想定される遺構。人骨が検出されなくても状況から墳墓と判断されたものも土壙墓とされる)。魚津克知は「海を舞台とした人間活動と深い関連をもつ脈絡により、海の近くに築造された古墳」と概念規定している(魚津2017「海の古墳」研究の意義、限界、展望『史林』第100号第1号、史学研究会)。考古学研究のうえでも、概念規定の曖昧さが論議されている。たとえば「海の」と規定するが、古墳時代の海岸線は現在よりもかなり内陸に入り込んでいた可能性が高く、現代では江線よりだいぶ内陸に位置する場合もある。また古墳時代の港湾施設は潟湖(ラグーン)の浜堤や砂嘴(砂丘)の内側や、河川を溯ったエリアに営まれていることも多く、現況の海浜部から距離については限定しづらい。ちなみに前記の魚津は「古墳時代の推定海岸線から原則として800m、最長でも1km以内」と暫定的基準を設定している。

### ●海浜型前方後円墳 海上から目視可能な交通の要衝に造営されるなどの特徴を持つ古墳

(詳細) 2013年11月に開催されたシンポジウム『海浜型前方後円墳の時代』(かながわ考古学財団主催)に際し、広瀬和雄が提唱した概念。そこでは「第一に、各地域の中で最大級であること。第二に、偏在性をもって前方後円墳が築造されているものが多い。第三に、首長墓としての連続性が乏しいものが多い。そして第四に、海から見えるような交通の要衝に立地する、定義した」(広瀬和雄他2015『海浜型前方後円墳の時代』(公財)かながわ考古学財団編、同成社刊の序文より引用)とされている。同書のなかで広瀬は「大型円墳なども含む」としている。「海の古墳」という規定より、より限定的な用例であると考えられる。

こしきづか

### ●五色塚古墳 神戸市垂水区に所在する古墳時代前期末～中期初頭の大型前方後円墳

(詳細) 全長194m、4世紀末～5世紀前。明石海峡に面した丘陵先端部に位置し、目の前に淡路島が迫る。『日本書紀』などにも記載される墓である。眼下には僅かな低地部しか広がっておらず、この低地部に古墳の造営母体が展開していたと考えにくい。明らかに明石海峡を往来する船舶などからの眺望を意識した立地と推定されている。源平合戦の一ノ谷・鶴越などの歴史スポットや、四国と結ぶ「明石海峡大橋」とも至近である。国指定史跡。

### ●長井町内原遺跡 三浦半島の西岸の古墳時代前期～平安時代を中心とした集落遺跡

(詳細) 横須賀市長井地区の台地上に所在。1970年代後半から90年代にかけて、学校校舎改築などで広範なエリアが調査された。現在の長井漁港を眼下に望み、土錘(漁網に使う土製のおもり)など漁撈具も出土しており、相模湾に生活の糧の基盤をおく、代表的な臨海性遺跡である(大塚真弘他『長井町内原遺跡』横須賀市文化財調査報告書第9集など)。

### ●長柄桜山古墳群 逗子市・葉山町境の尾根上に所在する前方後円墳2基の総称

(詳細) かつて三浦半島には大型の前方後円墳は存在しないと言われていたが、1999年(平成11年)春に第1号墳が、引き続き500m西側の丘陵先端部でも第2号が発見された。部分的な発掘調査の結果、両墳とも古墳時代前期後半期の有力な前方後円墳(規模は1号墳91.3m、2号墳88m)であることが判明した。相模湾と東京湾を結ぶ結節点に立地する有力首長墓であり、立地から臨海性が強く意識された景観を呈している。国指定史跡。

### ●長谷小路関連遺跡 鎌倉市由比ガ浜海岸の砂丘部に位置する遺跡

(詳細) 2016年に児童保育施設建設に先立つ発掘調査で石棺墓から女性人骨がほぼ完全に遺存した状態で発見され、注目された遺跡。上層の中世遺構群の下層から検出された石棺墓は副葬品などが伴わず詳細な時期比定は難しいが、総合的に古墳時代後期の遺構と理解されている。調査地点は当時の相模湾に面した海浜部における古期の浜堤砂丘

に位置していたと考えられ、被葬者と海洋性との関わりが注目される。また近隣の既往調査地点を点検すると古墳時代の墳墓と思われる遺構が東西に広がる浜堤に展開していたと思われる。また長谷小路遺跡群の東側に位置する「和田塚」が古墳であったかは判断が難しいが、近接して6世紀前半の人物埴輪などが出土した記録もあり、後期古墳群も造営されていた可能性が高い。同様の砂丘上に営まれた石棺墓は列島各地の臨海部に広く確認され、広域な海洋民の活動の一端を示している可能性が高い。また海蝕洞穴内に古墳時代後期以降に営まれた石棺墓とも関わりが想定される。ここでは太平洋沿岸地域、なかでも三浦半島南半部、および茨城県北東部のひたちなか市(那珂川河口部および阿字ヶ浦近辺)の墓制との関わり合いに注目している。

●**腕輪形石製品** 貝製腕輪を起源とする石製(碧玉や緑色凝灰岩(グリーンタフ)など)の腕輪類(詳細) 貝製腕輪の着装は、世界各地の風俗として広汎に認められる文化事象であるが、日本列島でも縄文時代以来、広く認められる。なかでも弥生時代には発展し、南海産のイモガイなどの特定の貝種が九州島を介して広域に流通していることが確認されている。鹿児島県種子島の南種子町広田(ひろた)遺跡では臨海部の墳墓遺跡から大量の貝製品が発見されており、弥生時代後半期から古墳時代にかけて、この取引に関わった人たちの残した遺跡として注目される。ただし貝製品は、酸性土壌の遺跡では、なかなか遺存しないので、正確な分布は不詳である。古墳時代になると列島中心部で、素材を石に更新し「石製品」として新たなデザインにて“創出”され、近畿地方を中心に拡散することが知られている。製作遺跡は山陰・北陸地方の限られた特定遺跡に収斂され、専門的な工人による生産が想定されている。県下では海老名市本郷遺跡などで生産されていた工房跡が確認されているが、地域生産品が近隣集落に供給されていた形跡は確認できない。小林行雄らの古墳時代研究者はこれを大和政権が創出し管理・配布した“威信財”と解釈し、当時の政治状況を指し示す一端と理解した。しかし腕輪として着装したものは考えられず、その使用法は不詳である。奈良県川西町島の山古墳で大量の腕輪形石製品が粘土槨(死者を納めた棺を白色粘土で被覆した埋葬施設)に貼り付けた状態で発見されていて注目される。

●**威信財** 器物に機能とは関係のない“価値”(みせびらかし)を認識する心性に基づく財(詳細) 大航海時代以来の植民地経営の進展に伴って西欧人の文化人類学者らが観察、報告した世界各地の首長制社会などで顕著に認められた文化的事象から派生した概念・用語。今目的にも舶来ブランドのバック・財布、高級乗用車、有名人のサイン入りグッズなどに価値を認めることと通ずるものがあると考え、これは“未開社会”(未開であったとは考えないが…)に限ったものではなく、威信財を通じた贈与(プレゼント)・互酬(おあいこ、お返し)・負債(引け目、負い目)の観念は、「不義理・不躰」など絡み合い、社会に複雑に根を張っており、古今東西ホモサピエンスに通用の文化事象であるとも考えられよう。考古学研究者が用いる概念としては、日々の生活の糧に用いられる道具・素材などの必要材・食糧財とは異なる希少性、奢侈性を帯びた素材・舶来品などの器物=「貴重遺物」を指し示すことが多い。中央の政治勢力から「配布」されることにより、「支配・被支配」という政治的関係を素朴に考えているのではないかと思われる言説も目立ち、負債・互酬性については不問に付されていることが多い。威信財取引の事例としては、南太平洋社会においてかつて行われていた「クラ貿易」が有名であるが、そこに認められる「交易品」の価値は実用的な効率・価値とは別次元のものであることが往々であり、とるに足りないような器物であることもある。ここで重視されているのは、贈与と互酬、蕩尽などのおこないにより現実社会とは異なる価値基準による威信の確認であり、現実の器物は考古学研究者が考えるような希少品であるとは限らない。考古学で言われている威信財について、単に出土品の中で「珍しいモノの別名」と揶揄する研究者もいる。

●**海蝕洞穴** 海食崖の亀裂や穴が海退と地殻変動の隆起などにより離水して洞穴となったもの(詳細) 「岩陰」とは明確に区分されていない。また「海食洞窟」とも呼称されるが、同じものである。縄文時代以来、ヒトの生活痕跡が認められ、遺跡が形成されるが、弥生時代以降は海産物の製作遺跡、古墳時代には墳墓として用いられている例が典型的である。古墳時代後期の墳墓遺跡としての利用は、当時の人々の“他界観・来世観”との深く関わるものである。海蝕洞穴は全国の沿岸部の崖面に分布するが、その全てが人間生活の痕跡に関わり合いのある“遺跡”として使用されていたわけではない。海蝕洞穴の利用が特に顕著なのは、紀伊半島南端部から三浦半島南半部を経て東北地方に至る太平洋沿岸地域である。特に三浦半島の南半部の三浦市市域の海岸部、および房総半島の南端部の南房総地域にその利用が顕著に認められる。なかでも三浦半島の雨崎洞穴(岩陰)遺跡などでは、弥生時代後半期から貝輪の製作遺跡として活況を呈しており、遠く伊豆諸島から続く『東の貝の道』を想定できる。また古墳時代の中葉からは、墓域として利用される事例が多く、朝鮮半島かにもたらされた金工品などを伴うものも多い。なかでも館山市大寺山洞穴では丸木舟を棺とした“舟葬”と思われる独特の風俗が確認され、副葬品も同時期の前方後円墳など有力首長墓と比しても遜色のない武器・武具類が出土する例もある。九州から列島各地の沿岸部に拡散した横穴墓との関係も注目される。これらに通底する「遺体の処理に関わる習俗・観念」は、東南アジアから東シナ海沿岸・琉球・九州島を経て広がる文化要素である可能性が高く、ユーラシア圏内の周縁に位置する倭人社会の基層文化の一側面として注目される。ちなみに海蝕洞穴は地質構造からして、不時の落盤が伴うものであり、寝泊まりを伴う生活拠点としての“住居”として適していたとは思われない。別派の非定住の漂海民・遊動民が台地上の農耕集落を横目にどこからともなくやって来て棲みついていた…という類のステレオタイプな観念は早々に捨て去るべきと考える。

## 「海洋民」との出会い

✓「海でつながる」という「感覚」とは  
～伊東と横浜と「どっちが近い」か？

✓長井町内原遺跡(横須賀市)の「石神」  
～古式土師器研究・外来系土器と「漁村」の違和感

✓古墳と交通路...長柄桜山古墳群からの景観  
～(農業)生産力の向上が古墳時代をもたらしたのか？

✓臨海性の古墳とは？  
～「古墳」は水上交通と切っても切り離せない...

✓長谷小路遺跡(鎌倉市)の女性人骨



むかし思えば苦屋の煙... (横浜市歌)なのか？

## 私たちは「誰の目線」で歴史を見ているか？

ジャン=レオン・ジェローム  
《カイロの奴隷市場》19世紀後半

(オリエンタリズム)  
東方趣味はアラブ世界を「非道徳・野蛮」とあげつらうことにより、帝国主義的な他者支配を正当化する文化装置としての役割を持っていた。

E. W. サイド(1935~2003)  
『オリエンタリズム』1978

兵庫県立考古博物館  
開館記念展ポスター  
(2008年)

プロ野球球団・北海道日本ハムファイターズは2015年11月9日、新千歳空港に掲げた「北海道は、開拓者の大地だ」と書かれた垂れ幕広告の表現がアイヌ民族への配慮に欠けていたとして撤去した。  
日本経済新聞HPより



## 『海洋民』とは？

特定の生業・習俗に限定せず

「海(川)に関わる生活」に関係する人びとを総称

cf. 海人・海士<sup>はくすいろう</sup>・白水郎・海部・海女・水手・漂海民・水界民・海賊・蛮民<sup>たんみん</sup>...

ひじょうに多様な相貌・生活スタイル...

さらに対象を広範にとらえた場合の『海洋民系文化』も存在する

ひいては古墳時代の倭人文化全般に広く「海洋民」に係る文化要素がちりばめられている

## 海洋民研究と考古学の現状～列島東部・古墳時代・交通・生業・移住...

- 戦前における研究
  - 六居論争
  - 舟葬論.../その「否定」(小林1946) など
- 『日本の洞穴遺跡』(1967刊)  
日本考古学協会の特別委員会による

赤星直忠  
(1902年~1991)

赤星直忠1970『穴の考古学』  
横須賀考古学会による三浦半島における洞穴遺跡の調査・研究の進展

明治35年横須賀に生まれる。神奈川県師範学校卒。昭和36年「横穴古墳の編年研究」にて文学博士

赤星直忠博士文化財資料館(宇内建設ビル内)  
<https://unai-kensetsu.e-yokosuka.jp/contents.html>



### 海洋民再考のきざし...海の考古学ブームの到来？

#### ・房総/三浦半島における調査研究の進展

海洋民研究の再評価の気運

- 館山市大寺山洞穴などの調査(1993~千葉大)

岡本東三他『千葉県の歴史』2003など

- 中村勉・諸橋千鶴子・靱持輝久『雨崎洞穴報告』(2015)
- 辰巳和弘1996『「黄泉の国」の考古学』講談社現代新書

#### ・新資料と研究の新展開

- 海の古墳を考える会2011『海の古墳を考えるⅠ

-群集墳と海人集団- ... 2017年までに6回開催

- 広瀬和雄他2015『海浜型前方後円墳の時代』

2013年11月シンポジウム開催

- 中三川昇・中村勉編2017

『墳丘を持たない古墳時代の石棺墓』 横須賀考古学会

かながわ考古学財団2015『海浜型前方後円墳の時代』同成社  
~2013年開催の記念シンポジウムの成果集



辰巳和弘2011

中村勉2017『海に生きた弥生人 三浦半島の海蝕洞穴遺跡』遺跡を学ぶ118 新泉社



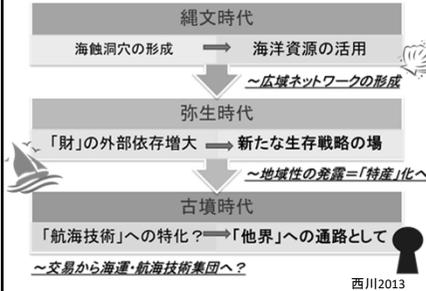
### ステレオタイプな「海洋民の姿」の呪縛を解く

呪縛① 古代から続く「海人」への「偏ったまなざし」(無自覚)

呪縛② 海洋民の「捉えどころのなさ」(≒軟構造性?)

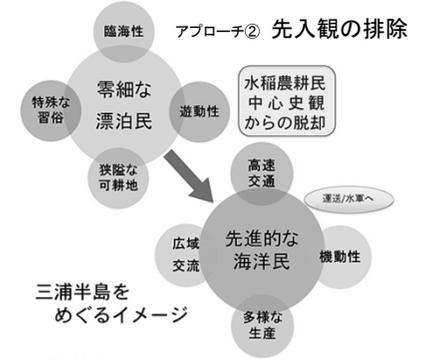
#### 2つの「道筋」

アプローチ① 正確な情報

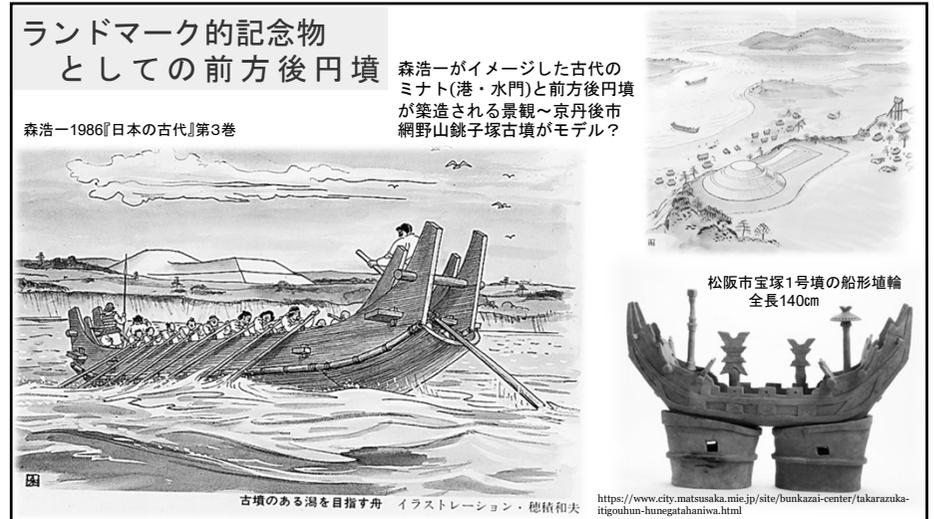
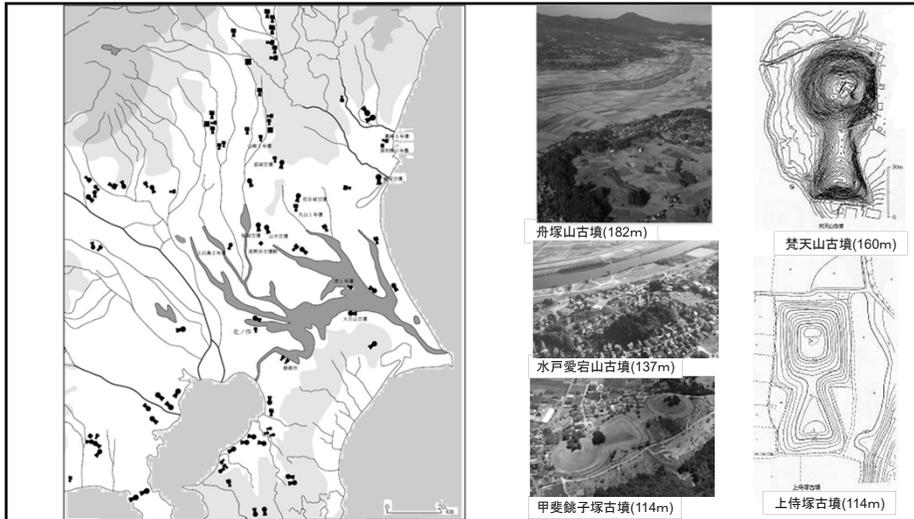


西川2013

三浦半島の海蝕洞穴と人びとの関わりの変遷



西川2013



「長谷小路の女性人骨」との出会い~海洋民研究の新時代 降矢・齊木他2016

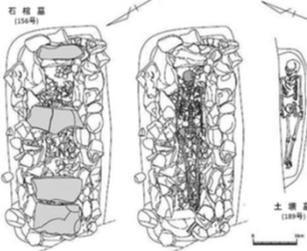
長谷小路周辺遺跡 (由比ガ浜こどもセンター地点) 2016年6月



調査団提供



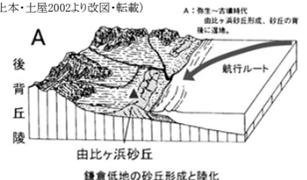
調査団提供



石積墓 (156号)

土室墓 (189号)

(上本・土屋2002より改図・転載)



A: 弥生~古墳時代 遺跡が高砂丘形成、砂丘の背に連続

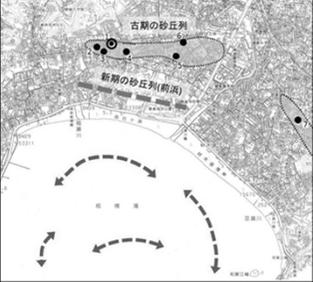
後背丘陵

航行ルート

由比ヶ浜砂丘

鎌倉低地の砂丘形成と陸化

砂丘上の墳墓群の再検討 「采女塚」(6) 長谷小路南 3-2-202-2他 地点 (2)



古期の砂丘列

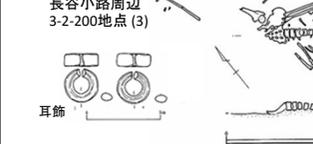
新期の砂丘列(前浜)



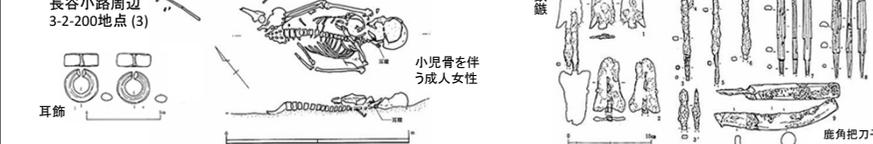

長谷小路周辺 3-258-1地点 (4)



長谷小路周辺 3-2-200地点 (3)



小児骨を伴う成人女性



耳飾

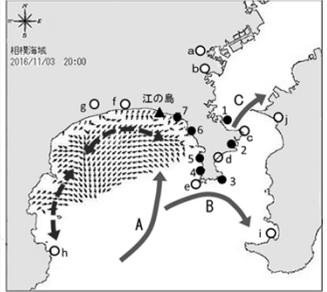
鉄鏃

骨鏃

鹿角把刀子

由比ヶ浜周辺の古墳時代墳墓の様相 (各報告より改図・転載/カッコ内は地図の番号に一致)

あまさき かつちゃ 雨崎洞穴／勝谷遺跡 雨崎古墳(1・2号墳 横穴墓群)



相模湾 2016/11/03 20:00

海上保安庁HPより <http://www.1.kaiho.mlit.go.jp/KANKYO/KAHO/oceanradar/currentsagami.html>

相模湾岸の潮流と主な海浜性の遺跡

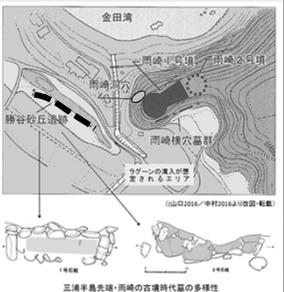
1 鎌倉 2 藤岡古墳 3 雨崎 4 三戸 5 なはま 6 三ヶ岡 7 長谷小路  
 a 軽井沢古墳 b 室ノ木古墳 c 鶴屋・鳥ヶ崎 d 長沢・かろうと山古墳  
 e 向ヶ崎古墳 f 石神古墳 g 穴蔵丘陵 h 伊豆 1 大寺山 j 君津



雨崎洞穴



1号 石棺状の石組



勝谷砂丘遺跡

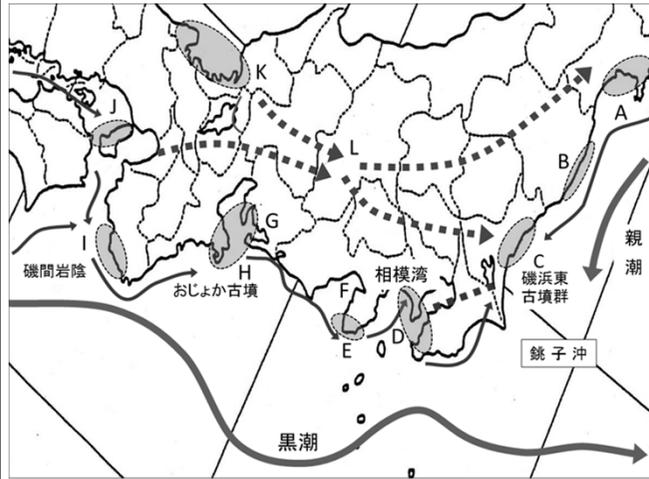
雨崎横穴墓群

カブツの遺人が埋葬される多量

(山崎2016/中村2016より改図・転載)



2号 釜石状の石組



磯間岩陰

おじよか古墳

相模湾

磯浜東古墳群

鏡子沖

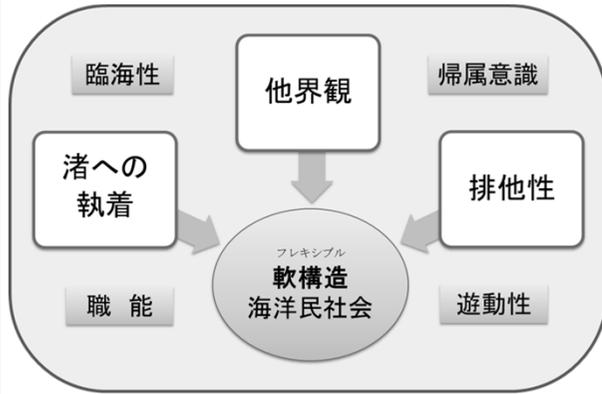
黒潮

親潮

太平洋沿岸の古墳時代の海洋性遺跡のネットワーク 西川2018

- 遺跡環境/立地には共通性が認められ、強い臨海性が認められる
- 関東地方南岸は東西・南北の交流が交錯
- 太平洋沿岸に海洋民のネットワークが存在 → ただし「等質」ではない
- このネットワークは列島東北部(北海道)や南西諸島(東シナ海)にもつながる
- 弥生時代から顕在化し、古墳時代前期後半に大きな変革が認められる
- 中部高地ルートにも濃厚な海洋民系の文化要素が認められる

3. 海洋民研究の対象と概念規定の困難さ  
～文化的な重層性を切り分ける



西川2018

臨海性墳墓と海洋民社会の関係性

ただし考古資料の示す様相が海洋民文化の「どの切り口」を示しているのかは不明確

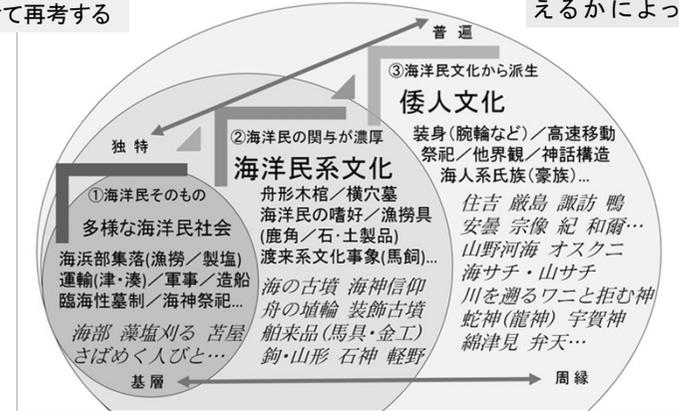
個別要素の比較検討のみでは大半が「手のひら」からすり抜けてゆき、何も残らない

ex. 鹿角製品/舟形棺/横穴墓/積石塚...

海洋民で「あるか・ないか」ではなく広範な「海洋民系文化」として、ひいては倭人文化全般について捉えなおす必要性

文化要素を重層的に切り分けて再考する

考古資料をどの位相で捉えるかによって異なる



西川2018

海洋民文化を「重層的」に捉えなおす

4. まとめと展望

1. 海洋民研究は新たなステージにある～総合的研究の必要性
2. 個別事象を海洋民で「あるか・ないか」では研究は進展しない
3. 「海洋民の関与」という視点で、もっと豊かな地平を眺望しよう  
情報を重層的に切り分けて解釈する
4. 臨海性遺跡の重要性の再評価

問題点 重要な臨海性遺跡でも、周知化すらされていない現実  
荒廃が進み破壊が進展しているものも多くある...

横浜市街の海浜性遺跡